

中国東南沿岸部の新石器時代

西 谷 大

I 序説

III 広東省

II 福建省沿岸地域

IV 討論

論文要旨

中国東南部は、およそ浙江・湖南・江西・広東という広範囲の地域を指す。この地域は、漢書によれば「交阯より会稽に至る七、八千里、百越雑処す、各種姓有り」とあり、いわゆる印紋陶が分布する地域に重なって、「百越」と表現されるさまざまな諸族が居住していたと思われる。さらに、春秋戦国期には、呉・越が、秦から前漢期には、南海貿易を支配した南越国が出現し、中原と争う程の勢力を持つようになる。このように、春秋戦国期以降、中国東南部は歴史学上、政治的、文化的に一定の発展を遂げているが、それ以前、先史時代からのつながりの中で、一体どのような歴史的経過をたどってきたのだろうか。本稿では、東南中国でも遺跡数が多く、時間的な連続性のたどれる、特に江南デルタ以南から珠江デルタにかけての沿岸地域に注目し、新石器時代中期から晩期をとりあげ、歴史的な動向とその内在的変化の要因について考察する。

広東・福建省という広範囲を扱うため、時間軸を土器編年によって設定した。従来の編年案を検討しつつ、広東珠江デルタの新石器時代中期から晩期をⅠ～Ⅴ期に、福建省閩江デルタをⅠ～Ⅲ期に分期した。それぞれの時期は、珠江デルタのⅠ～Ⅲ期がおよそBC. 4000年前後からBC. 3500年、Ⅴ期がBC. 2000年前後に相当する。一方、福建閩江デルタⅠ期はBC. 4000～3000年、Ⅲ期がBC. 2000年ごろと考えられる。

両地域を比較すると、BC. 4000年前後以前の新石器時代の様相がまだ不明確ではあるが、両地域ともこの時期を境にして共通した遺跡分布を示している。即ち、デルタの上部の水系沿いまたは大陸沿岸部や島嶼部に、遺跡が形成され、デルタ内部には形成されない。また珠江デルタではⅠ～Ⅲ期、閩江デルタでは、Ⅰ期に遺跡が増加しており、これに後続する時期に、遺跡が減少する傾向が見受けられる。

珠江デルタ地域では、土器群の様相と、遺跡の空間分布から、Ⅰ～Ⅲ期において、デルタ上部から珠江口、大陸沿岸部までをテリトリーとする集団と、沿岸部にだけ遺跡を形成する2つのタイプの集団が並存したことを指摘した。この現象は新石器時代中期に遺跡を形成した各集団の沿岸・デルタ・河川における棲み分けを暗示しており、内陸から河川を通じた沿岸部への、各文化間のネットワークを構築していくきっかけとなったのではないかと推定した。沿岸部にのみ居住する集団は、デルタ上部を中心としてデルタ全域に居住する集団より、福建省沿岸や、対岸の台湾沿岸との交流が深い可能性があり、各集団間の関係は、時間の経過と共にその都度変化がみられる。

このように新石器時代中期においてなぜ突然遺跡の分布が濃密になるのか。それはこの地域の地形上の特性と海進海退という自然現象に左右された面が大きかったためであり、長江下流太湖の周辺地域との比較からも窺うことができる。中国東南部の沿岸地域では、この時期遺跡をとりまく自然環境、とりわけ、地理的な要因が遺跡の形成に大きく関わっており、それが歴史的な動向にも色濃く反映していたものと考えられる。